



北朝鮮の危機も真実味を帯びてきた？

北朝鮮情勢がかまびすしい。

きっかけをつくったのは、10月の「国難、選挙だが、安倍首相が解散の大義として語った、北朝鮮情勢の山場はあと1年—、という言説が、真実味を帯びてきているのだ。理由は、北朝鮮のミサイル技術の向上が、昨年までの軍事専門家たちの予測を超え、進化しているというのだ。11月29日には、米国を射程圏内におく、ICBMを発射してみせた。

こうした状況を反映して、日米韓の対応もエスカレートしてきている。

ICBM 発射後すぐ、韓国はミサイル演習を行ない、日本は「発射と同時に追尾していた」と、ICBM が海上に着水する前に発表した。こうした状況下で最も注目されるのは米国だ。米国本土に核攻撃が可能になったと判断され次第、先制攻撃を加えるという。

一方米国側は、日本に対して、先制攻撃力を行使する備えを求めてきている。そして、それこそが、戦争状態に陥ることを防ぐというのだ。対話が成立する場合には、交渉の余地があるが、国際世論を全く無視し、ミサイルや核兵器の実験に邁進する北朝鮮はそうではない。そうさせている要因は、隣国の韓国はあまりにも脆弱で抑止力にはなっていないことにあると、米国はみなしている。だからこそ、韓国に準じて北朝鮮に近い日本に対して、現在の北朝鮮には平時の発想をすて、「戦後の日本人を構成してきたメンタリティを変えろ」とまでいう。

自国の自然災害、古来から繰り返してきた自然災害に対してすら、メンタリティを変えられない日本人が、朝鮮半島有事にどう構えることができるか。

今後の数年間、天皇の退位、五輪開催など国際的に注目を浴びる中で、どう新時代を向かえることができるのかが問われているのだろう。

(2017年11月)